

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	朴 瑞庚
論文題目	日本人学習者による韓国語の音声運用に関する研究 —学習者の動機づけと韓国語の音声運用上に見られる特徴— (論文内容の要旨)		
<p>本論文は、大学における第二外国語としての韓国語教育を視野に入れ、大学に入学後に韓国語を学び始める日本語母語話者の韓国語学習者 (以下、学習者とする) の韓国語音声の習得上の問題点の解明を目標とし、学習者の動機づけの観点と音声学の枠組みに基づいて、習得上の特徴を調査、分析した実証的研究である。全体は7章から構成されている。</p> <p>第1章は序論に相当し、本論文の学術的背景と目的が述べられている。ここでは、韓国語の母音や子音の特徴と、第二言語としての韓国語教育が概説されると共に本論文の目的と対象領域、論文の構成等が述べられている。</p> <p>第2章では、学習を始めて間もない学習者を対象とし、自己決定理論に基づいてアンケート調査を実施し、どのような動機づけに基づいて韓国語の学習を行っているのかの調査研究が提示された。従来は小人数を対象とした研究が多くみられたが、本論文では250名以上の被験者を対象としてアンケート調査を実施し、大規模なデータの収集と分析を実施している。その調査の結果、学習者は外的圧力によって動機づけられている状態で韓国語を学習する傾向が強いことが明らかになった。学習到達度と学習者の動機づけの関係を調べた結果では、学習到達度の低い学習者ほど外的にも内的にも動機づけられておらず、学習意欲自体がない者が多く、学習到達度の高い学習者ほど動機づけがより内在化されている傾向が見られたことなどが報告されている。</p> <p>第3章では、韓国語を学び始めて1年経過後の学習者が韓国語の各音声に対する難易度をどのように判断しているのか、及び、聴取と発音の両側面から、実際に韓国語の音声をどのように運用しているのかを分析し、考察している。その結果、学習者は母音の聴取と発音においてさほど負担を感じていないことが明らかにされたが、一方、聴取実験や発音実験の結果からは学習者の抱える問題点も明らかにされた。子音に関しては、平音、激音、濃音という3項対立をなす初声子音の中で濃音の発音に対して負担を感じていることなどが明らかにされた。</p> <p>第4章では、学習者が韓国語の音韻規則に対する知識の有無と、音韻規則を発音へ適用する際においてどのような特徴が見られるのかが検討されている。音韻規則に対して正しい知識を持っている学習者の比率が低いと、発音への適用率も低く、間違った知識が発音に反映される傾向が強いことなどを実験によって明らかにしている。</p> <p>第5章では、第3章で実施した発音実験を拡張させ、実際のコミュニケーションの場面を想定し、発話スタイルの変更によって学習者の発音した韓国語の音声にどのような変化が</p>			

現れるのかを検討し、学習者による韓国語の音声運用について考察を深めている。普段のコミュニケーションで用いる発話スタイル（CNV）と比べて、コミュニケーションが困難な状況の中で聞き手の理解を助けるために話し手が音声をより明瞭になるよう調整を行う発話スタイル（CLR）においては、濃音と激音の了解度は上昇し、平音は下降する傾向が見られることを報告している。また、学習者と韓国語母語話者の音声の音響分析も実施している。

第6章では、比較的上級段階の言語活動であるスピーチに対して学習者のデータを収集し、パラ言語と関連付けて考察し、韓国語母語話者は学習者のスピーチ音声を評価する際に、パラ言語を評価基準としていることなどが示唆されている。

第7章では本論文の総括を行い、本論文の意義と今後の課題について論じている。本研究で明らかになった点を踏まえ、学習者の指導方法を模索するなど、教育の現場において本研究で得られた知見を具体化していく可能性が示唆されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、主に大学における第二外国語としての韓国語教育を視野に入れ、大学に入学後に韓国語を学び始める日本語母語話者の韓国語学習者（以下、学習者とする）が韓国語音声の習得過程上に抱える問題点の解明を目標とするものであり、学習者の動機づけの観点と音声学の枠組みに基づいて、韓国語音声習得上の諸特徴を調査、分析、記述した実証的研究である。

本論文の音声学上の貢献としては、従来、少数の被験者を対象として、特定の音声項目だけを扱うことの多かった実験音声学的研究に関しても、調査項目によっては、100名以上の大規模な被験者を対象として、広範囲にわたる多数の音声項目に対して、音声の聴取及び発音に見られる諸特徴を分析し、音声の知覚と産出の両側面を考慮してデータを蓄積し、詳細かつ精緻な記述を行った点が挙げられる。

従来、韓国・朝鮮語の教育に携わってきた教育者が現場で感じてきた、学習者の発音や聞き取りの教育上に生じる疑問点や問題点に対して、音響音声学的な分析に基づく客観的な数値データを提供している点に関しても本論文の学術的な意義が認められ、第二言語教育に貢献する点も高く評価することができる。また、伝統的な音声学の枠組み内での研究に留まらず、第二言語教育への適用や、外国語学習における動機づけの観点へと研究を発展、展開した点からも申請者の韓国語教育にかける高い意欲と情熱を読みとることができる。

韓国語の学習全般における動機づけや発音学習における動機づけの研究も、従来は小人数を対象とした研究が多くみられたが、本研究では250名以上の被験者を対象としてアンケート調査を実施し、大規模なデータの収集と分析に成功しており、その成果を今後の第二外国語教育に反映することが期待される。学習者の動機づけの減退を防ぎ、動機づけを高めるための基礎的資料としての価値も高く評価できるものである。このような大規模なデータの収集と分析が可能になった背景には、申請者の現赴任先での多くの学習者の協力という好環境があり、それを十分に活かそうとする申請者の研究にかける積極的な姿勢も見逃すことはできない。

その反面、その大量の分析データから得られた結果は、従来の少数のデータや演繹的に予測されていた知見と大きく異なる方向性が導き出された訳ではなく、いわゆる常識的な範囲内での結論に落ち着いている点は否めない。しかしながら、従来、慣習的にあるいは直感的に感じ取られていた外国語教育上の問題点に対して、オリジナルで質が高く、より客観的な数値データによる裏付けを与え、今後の韓国語教育の発展に大きく貢献するものと期待される点は高く評価できるものである。

言語の研究においては、新たな理論的枠組の提示やオリジナルな言語データの提供が望まれるが、本論文は、まさしく、大量かつ広範囲に及ぶオリジナルかつ質の高い

音声資料の収集とそのデータの精密な観察・分析を実践したものであり、韓国語音声の記述面での研究の発展への貢献においても、高く評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認められる。また、平成26年1月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めたものである。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当面の間当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成26年3月24日以降